

く、複数の命題全体から元の命題への上昇が考えられている。オッカムの場合も、彼自身は明確には述べていないが、やはり元の命題と下降によって形成された全命題群とが等値になるような下降を考えていたのである。更に又、名辭が配分周延的な不特定共通代示を持つために必要なものとして Corcoran と Swiniarski が挙げている、一つの単称命題から元の命題への上昇が不可能である ( $\sim A$ ) という条件は、オッカムのなかに見出だされる、古い時代の考えの名残りであって、彼の代示の理論のなかで重要な役割を果たすものではない。

以上が Priest と Read の自己弁護であるが、然しこれまで述べてきたごとく、Priest と Read の解釈では、特称否定命題の述語の代示に関してオッカムのテキストそのものと矛盾することになる。書評者が考えるに、このことは彼らの解釈の致命的な欠点なのではないか。更に又、彼らの自己弁護が正当なものであるとも思われない。これらの問題については、稿を改めて論ずることにしたい。

日本クザールヌス学会編  
『クザールヌス研究序説』

国文社，1986年，327頁

熊田 陽一郎

本年二月に刊行されたこの論文集は、現在の日本におけるクザールヌス研究の水準を示すものであるが、他方従来余り知られていなかったこの思想家についての啓蒙的解説の役割を踏まえて、ゆきとどいた構成を示している。

「青年時代のクザールヌス」(酒井修)を頭に、小山・酒井紀幸両氏による『知ある無知』をめぐるクザールヌスの思考の成立と方法を説く論文を据え、以下、『推測論』(大出)、『知ある無知』からの無限の問題(藺田)、『可能現実存在論』(八巻)、『隠れたる神についての対話』(リーゼンフーバー)と、大体において一研究者が一著作を分担する形でクザールヌス思想の本質的内容が論じられる。その後「クザールヌスとネオプラト

ニズム」(野町)、「宗教意識の展開に関する一考察」(清水)と、思想史の立場に立つ二論文を置き、最後に彼の実践的活動について、宗教改革(ネメシエギ)、平和運動(坂本)、ローマ法と人文主義(渡辺)と三つのテーマが論じられ、この巨匠の多方面に互る業績を展望できる形になっている。いづれにしても多年クザーヌスの研究に従事して来られた方々の手引によって、専門外の我々もこの錯綜した思想の森に足を踏み込むことができるのは幸いというべきであろう。ここでその内容について論評することは筆者のよくする所ではないので、各論文を通読してその理解に努めながら、なお理解し得ぬことについて質問を呈するという形で、幾分なりとも内容を紹介させて頂きたい。なお紙面の都合上、全部の論文に触れることはできなかつたことは、あらかじめ申し上げておかねばならない。

『知ある無知』についての小山・酒井両氏の論文は、この書の構成を、第一巻神論、第二巻宇宙論、第三巻キリスト論と分別した上で、この三者の統一的関係を探ろうとする。即ち第一巻において神の無限性に到達し得ぬ被造的知性が、その無知を意識しつつ、しかもなお、無限に至ろうとする「漸近線の思考」として把握される。そしてこの漸近という超越の動きは、第二章で「縮限」としての宇宙の考察を経て、第三章キリスト論へと展開完成される。ここで先ず問題になるのは、「縮限」と訳された *contractio* の概念であろう。他の箇所でも屢々考察されるこの概念は、クザーヌス理解のキーワードになる概念と思われるが、やはりその理解は容易ではない。世界は多からなる統一(*uni-versum*)であるから、かかる一と多の制約関係を縮限と呼び、その無限性は *contracte infinitum* として、神の *absolute infinitum* とは本質的に異なるのだという説明(50頁以下)は了解できるが、このような制約性はすでに新プラトン派以来常に意識されていたことであるから、この制約性を新しく「縮限」という言葉で呼ぶ時、そこに現われる「縮み」の意味は一体何なのだろうか。

この説明のために、第五章「*Quodlibet in quolibet*」から、次のような命題が引用される。「宇宙は太陽でも月でもないけれども、太陽のうちでは太陽であり、月のうちでは月である。しかし神は太陽のうちでも太陽ではなく、月のうちでも月ではない」(57頁)。それ故に神は「絶対的何性」(*quiditas absoluta*)であり、宇宙は「縮限的何性」(*q. contracta*)ということになる。しかし他方、「万物(*omnia*)は石においては石であり……知性においては知性であり、神においては神である」というテキストがあつて(56頁)、全体とい

う集合とその各要素の制約関係として理解されているが、それでは神もこの全体の中の要素として制約関係の中にある以上、やはりその無限性は縮限されてくるのではないか。

この疑問は更に第三巻のキリスト論につながる。この受肉論が単に信仰実践の論議に留まらず、この書の思考を展開完結させる「同一化的思考」であるという主張は首肯できるが、ではキリストが「絶対的且つ縮限的」(absolutum et contractum) であるといわれる時、これはどのようなあり方なのか。勿論神人キリストの表現には常に逆説がつきまとうことは分るが、制約されざるものと制約されるものが一つになり、そしてそのキリスト論が、「把握され得ぬものを、把握されない形で把握する」という、人間の思考展開に結着をつける機能を負わされるとなると、これはどうしても“Deus ex machina”の観を呈するを免れることができない。

神と世界の無限については、藺田論文が同じく『知ある無知』に抛りつつ、クザーヌスの数学的方法に注目する形で論じている。ここでは「無限への転移」の方法によって数学のもつ symbolum 性が語られるが(117頁以下)、『推測論』についての大出論文では、数はむしろ有限と明言され、1000を越えぬ数のなかに、一性と完全性による象徴的価値を見出している(78頁以下)。いづれにしてもクザーヌスが最も確実とする数学的思考の意味について、私にはまだ十分に理解することができない。

リーゼンフーバー論文は、中期の小品『隠れたる神についての対話』から、神への問を人間認識の可能性と限界への問として論じている。そのなかで、神を対象として把握する試みはすべて挫折し、神はむしろ真理自体として、即ち無知を自覚した人間の認識に先行し、これを成立せしめる根拠として理解される。しかしながら、いかに精神が自分の無知を覚って、その主体性・自立性を真理に対して相対化するにしても、これによって今度はその先行する根源としての真理自体が、「いわば主体としての機能を得る」(178頁)のはどういう根拠によるのだろうか。なぜ真理は突然「主体」となるのか。同様の疑問が更に続く一節、「精神が真理を、自らの全存在と働きの源であると共に、それらなしにも全面的にそれ自体としてあるものと認め」という記述にも向けられる。ここで真理自体は、やはり精神から切離されて自体化され、対象化されるのではないか。

そしてこの真理への精神の関わりが、「祈のような行為」といわれる時、この祈の業が、対話篇の発端に語られるキリスト者の行為であったことを思い出すことになるが、

それにしても我々はこの「祈り」をどのように理解すべきなのか。祈は具体的行為であるから、単に外的な対象行為に「なりさがる」恐れがあるとは論者も認めている所だが(181頁)、我々がむしろ問いたいのは、祈を含む宗教行為が対象性を欠いて成立し得るものであろうか。「宗教的行為の遂行は、根本的に人間の超越論的構造の純粋な表現である」という規定は、キリスト教・異教を問わず、通常の宗教行為についてあてはまるのだろうか。そこには必ず祈という行為のもつ本質的な指向性、対象性、そしてその対象の主体性が忍びこんでくることは、先に指摘した通り、「主体性」「それ自体性」が真理自体についても語られることから推察されよう。

更に難解なのは、八巻論文の扱った“*Possest*”の概念であろう。神は「存在可能である通りに現に存在している」。従って被造物のように、現実存在するのとは異った仕方でも存在可能なのではない。この「絶対的可能性」の考え方自体が難しく、又論者も指摘する通り、*De docta ignorantia* の論旨とは喰い違っている。しかしこの *Possest* なる神に更に包含 (*complicatio*) の概念が適用され、神は「包括的に万物である」といわれるが、その神から、すべての被造物は展開 (*explicatio*) するのである。この包含一展開の関係と可能一現実の関係とは、どのように関係するのか、すべての可能性を實現している神が展開して、可能性を可能性のままでもつ被造物になるとは、どういう事態なのか。「なせ円満充足せる神が世界を創ったのか？」という古来の問が、ここで事新しく、いわば先鋭化された形で問われるであろう。

野町氏の「クザーヌスとネオプラトニズム」は、*Codex Cusanus 186* を手掛りとして、当時の教会史や出版事情なども織り込みながら、クザーヌスのネオプラトニズムへの関わりを示した要領のよい解説である。ここでクザーヌスが、プロクロスを介してプラトンのパルメニデス篇に接し、これを自らの思想の骨子としたことが示されている。いづれにしてもプロクロスの理解が、中世とルネッサンスの両思想の研究と理解に大きな役割を果すことは明らかであるから、今後の研究の発展を待ちたい。

こうしてクザーヌス研究者諸氏によって拓かれた徑を歩いてみると、私には理解の及ばぬ錯綜した思想ながら、臚げに次のような形が見えてくる。クザーヌスという中世と近代の境に位置する思想家のなかに、キリスト教自体の伝統と共に、アウグスティヌスと偽ディオニシウスに媒介されたプラトニズム、中世後期を支配したアリストテリズム、そして新しい数学的思考などが流入している。彼はこれらの思考方法や概念を集

め、独自に考え抜き、ソクラテス的な「無知の知」という哲学的態度によって吟味し再体験している。そしてそこから生まれてくるものは、スコラ盛期の思想の如き、巨きな総合と統一ではない。むしろ彼に流入した様々の思想は、その圭角を鋭く磨きあげられて、互いにせめぎ合い傷つけ合っているように思われる。そして「人間的な神は推測的世界を自分自身から展開する」(大出論文 76 頁)。人間の思考は独立し、キリスト教と教会の枠を破って溢れ出ようとする。しかも彼自身は、*coincidentia oppositorum* という言葉の示す位置に踏み留まった。従ってその前を探ろうとする者にも、その後を学ぼうとするものにも、彼は興味ふかい研究対象である。彼は誰にとっても親しい、しかし実は理解し難い言葉を語るのである。

Alois M. Haas: *Geistliches Mittelalter*.

Freiburg (Schweiz), Universitätsverlag, 1984, 547 S.

小田川 方子

この書『宗教的中世』は、前号の『中世思想研究』(第27号)の「書評」で筆者が扱った『〈唯一なる一〉。ドイツ神秘主義の理論と言語についての研究』の編者の一人である Alois M. Haas によるものである。かれは 1934 年にチューリッヒに生まれ、中世研究、ドイツ文学、歴史学を修め、1969 年から 71 年までモントリオールの McGill 大学の教授、1971 年以来母校のチューリッヒ大学のドイツ文学の教授で、特にドイツ神秘主義の権威として著名である。この書はかれの最新の論文集であり、1980 年前後の論文を中心として全部で 26 篇より成る大部なものである。

まず序文で、著者は、中世キリスト教の充実と豊富に対するかれの感嘆を述べている。中世は宗教性で充たされており、それは疑いなく「豊かであると同時に深く、繊細であると同時に力強く、個性的実現において独創的で多様であると同時に、原則的なものにおいて一義的である」。この宗教性は確かに今日のわれわれにとって異質な面も